

斎藤茂吉と欧州留学覚書

小 泉 博 明*

[要旨] 長崎医学専門学校教授であった斎藤茂吉は、博士論文を仕上げるために、欧州へ留学し、その目的を遂行することで、渡欧前の鬱屈した精神的負荷から解放された。本稿では、欧州への留学前の準備、往路熱田丸、帰路榛名丸の船旅などの茂吉の周縁について炙り出し、欧州留学を契機とした茂吉の心情と行動の核心について探究した。

1. 留学準備

斎藤茂吉は1921(大正10)年、長崎医学専門学校教授であったが、文部省在外研究員の資格を得て、欧州へ留学することになった。「手帳」によれば、次の辞令が発せられた。

○二月廿八日辞令、(三月二日、土曜、山田校長辞令ヲ呉レル)/長崎医学専門学校教授斎藤茂吉/精神医学研究ノ為満二年間英吉利国仏蘭西国亜米利加合衆国瑞西国奥地利国へ留学ヲ命ズ/大正十年二月二十八日/文部大臣従三位勲一等中橋徳五郎 [印]

[文部省研専六号] 文部省在外研究員斎藤茂吉/渡航旅費留学中学資及帰朝旅費トシテ金五拾円ヲ給ス/文部大臣中橋徳五郎 [印]¹⁾

そして「手帳」によれば、茂吉は次の誓書を提出した。

誓書/今般英吉利国仏蘭西国亜米利加合衆国瑞西国奥地利国ニ於テ二年間精神病学研究ノ命ヲ受ケマシタ就テハ在外中竝帰朝後共御規定ノ旨ヲ遵奉シマス/大正十年三月一日
文部省在外研究員斎藤茂吉 [印]/文部大臣中橋徳五郎殿²⁾

第一次世界大戦の勃発で欧州への留学は不能となっていたが、その後医学仲間の留学熱が沸騰し、茂吉の同級生も留学し研究業績を挙げていた。ちなみに1921(大正10)年の精神医学の状況は、スイスのロールシャッハがインクの斑点が何に見えるかという「ロールシャッハ・テスト」を考案し、日本では森田正馬が「森田療法」を発表したのであった。

39歳となった茂吉は、医学上の業績も乏しく焦燥に駆られたのである。欧州留学の目的は、学位(医学博士)の取得であり、暗黙ながら青山脳病院院長の後継者という路線を確定するためであり、娘婿の茂吉にとって欧州留学の経験もある養父紀一の期待という大きな重圧があった。下世話に言えば、洋行帰りで箔を付けるためである。留学先には瑞西国、奥太利国がある

* 教授/日本思想

が、敵対関係あった独逸国は記されていない。文部省在外研究員とは言え、実質的には自費留学であり、養父紀一から資金援助があったと思われるが、実情は平福百穂画伯などの友人から援助を得ていた。紀一は衆議院議員の再選に敗れ、潤沢な資金がなかったのである。この時の内閣は立憲政友会で、平民宰相と言われた原敬である。文部大臣は同じく立憲政友会の中橋徳五郎であった。留学費用として50円が支給された。また「手帳」によれば、留学中1年間だけ300円を給与すると、次のように言う。

校長の意見なりとして、「一ケ年三百円ヲ給与スルコトハ笹川君ノ例モアルコトユエ、一ケ年ダケニシテ呉レルコトヲ承知シテモラヒタイ」(略) 山田は未だ「人間」の「心」を理解し得ぬ³⁾

長崎医学専門学校の山田基校長は「陸軍の軍医出で南満医学堂教授在職中予備役となり、長崎医専に校長として着任した人で、いわば軍国主義の面が強く、文学者を非国民のように嫌った⁴⁾」ので、茂吉とは良好な関係ではなかった。森鷗外も陸軍軍医であったにも関わらず、少なからず山田校長のように文学(文芸)を軟弱なるものと見なす者がいたのである。2年間の在外研究であるが、校長が前例に則り1年間だけの給与としたので、茂吉は不快感を手帳に残したのである。また、茂吉の留学前の健康診断の結果は、必ずしも万全ではなかった。一年前の1920(大正9)年1月6日にインフルエンザ(俗にスペイン風邪)に罹患し咯血し、一年近くに互り温泉に転地療法などをし、養生していたからである。

友人の神保孝太郎博士は私の蛋白尿を認めて注意するところがあった。『なあんだ斎藤！

Eiweiss が出るじゃないか！』といった調子である。兎も角遠い旅に出るのであり、異境へ果てることがあっては悲しいとおもって、少しく煩悶もしたのであった。ある日、入沢博士の診察を受けた。先生は大體診られ、尿を検査しておられたが、『なる程、あるね』とすずかに云われた。(略)一寸考えておられた様子だったが、『まあ行って見給え』という結論であった。⁵⁾

その後茂吉は、煩悶していたが、夏には信濃富士見に転地し養生に専念した。富士見には島木赤彦、平福百穂、中村憲吉、土屋文明らが訪れ、上諏訪で洋行送別会も開催した。さらに、医者、歌人、同級などの送別会にもできる限り参加した。

さて、1921(大正10)年1月20日、久保田俊彦(島木赤彦)宛に「当分以下他言無用」という書簡があり、留学前の茂吉の素直な心情を読み取ることができる。以下は抜粋である。

茂吉は医学上の事が到々出来ずに死んだといはれるのが男として、それから専門家として残念でならぬ、一體小生はこれまで他国に出て他流に交はりしことなかりしが、長崎にて他流の同僚に交りて、小生も左程劣りはせずという自信が出来、学位など持つてゐるものに較べてちつとも劣ってはゐずといふこと分り候ゆゑ、今後は少し為事をすればよろしきなり。⁶⁾

茂吉は「学位など持ってゐるものに較べてちつとも劣ってはゐず」と自信をのぞかせてはいるが、裏返せば学位を取得していない劣等感に苛まれ、年齢的にも一刻でも早く取得しなければならぬという強迫観念に迫られていたと思われる。この書簡は、茂吉が欧州へ留学し「医学上の事」を為すことを決意すると同時に、作歌という「業余のすさび」への訣別を覚悟した悲痛な叫びなのである。なお、茂吉の次男宗吉(北杜夫)は、茂吉が医学に執着する理由として「一言でいえば、歌では食べてゆけぬからである。もう一つの理由は、医学界が前近代的、封建的であることである。(略)負けず嫌いの茂吉がこのように勢いたったのは無理からぬ心情だ。」⁷⁾と言っている。茂吉には、健康上の不安が残ったが留学を断念する選択肢は無かったのである。

また、1921(大正10)年9月に、陸軍軍医総監を辞し帝室博物館長であった森鷗外を、平福百穂と共に訪問した。留学前の期待と不安が交錯する中で、尊敬する鷗外に激励され、年齢差はあるが、医学者であり文学者である両者だけに相通ずるものがあり、覚悟が定まったのであろう。

2. 往路熱田丸に乗船前

斎藤茂吉は、1921(大正10)年10月27日午後5時15分東京駅を出発した。「みおくれた100名ほどのうち、精神科関係者は35名ほど」⁸⁾という。茂吉の「手帳」には、

東京駅見送人芳名 が記録され、東京市助役前田多門⁹⁾、内務省衛生局榎田五郎、神保孝太郎、西ヶ原王子脳病院小峰茂之、平福百穂、慶應大学病院精神科中井龍彦などの名前がある。98名の見送り人の激励に対して、茂吉は律儀に応答したことであろう。しかし前途洋々たるべき茂吉であるが、歓喜と悲哀の坩堝の空間に置かれたままで、養父の期待に応答しなければ、茂吉の存在証明は喪失するのであった。茂吉の涙涸涸として流れる光景ではないが、悲涙潺湲としてあふる心境であったと推察される。茂吉の背中には悲哀が張り付いていたであろう。

また「手帳」の「祝電贈ラレシ人々ノ芳名」によれば38名からの祝電があった。

「出羽ノ海、赤彦。輝子。(略)安田鞆彦、岡本かの子(略)木下利玄。(略)石原純。結城哀草果。(略)原阿佐緒」などの名前がある。なお、圈点を付した出羽ノ海は、出羽嶽の親方である。紀一の許で出羽嶽(佐藤文次郎)は養われていた。

同じく「手帳」に、**餞別おくられたる方々の芳名**、が記録されている。金銭もあれば、物品もある。物品は以下のような物である。

木村男也(安全かみそり)、小峰八郎 菊山京(奈良人形)、齋藤秀雄(カバン等)、時友文之助文子(安全カミソリ シャボン カップ)、栗山重信(ハンケチ、クツ下)、入澤達吉(画帳)、下田光造(ソーセージ)、佐々木信綱(ハンケチ1打)、林よし(ハンケチ1打)、呉秀三(絹ハンカチ)、石田秀(反物一反)、倉橋審三(のし梅2箱)、氏家信(絵画写真)、大阪柳屋(錦絵)、琅玕洞(せんべい一箱)、笹川ます(テーブルクロス)、中澤久米代(靴下)、島壽子(ハンケチ)、土松謙之助(三越切手)、土屋文明(神鈴)、林郁彦(ホシイカ)、山口八九子(絵)

恩師呉秀三からは絹のハンカチを、歌友土屋文明からは神鈴を贈られている。実用品もあるが、のし梅、煎餅、干し烏賊など当時の饞別品らしい。また、饞別金は16人と事務一同からで、総額199円であった。事務一同から10円、事務長の板坂基一が2円である。また、茂吉の故郷金瓶村の宝泉寺住職の佐原隆應から20円とある。その他、出入り関係の商店から18円の饞別金がある。留学費用50円の支給を考えると、それなりの金額と推察される。東京駅の見送り、祝電、饞別を見るに、いかに当時の欧州留学への人々の対応が大掛かりであり、華々しいものであったかを髣髴させる。このような祝賀ムードとは対照的に精神的な重圧であろうか、茂吉には意気軒昂とした姿や笑顔は無く、沈鬱とした寂寥感が漂っていたように思われる。

3. 往路熱田丸での船旅

茂吉は、10月28日に午前10時出帆の日本郵船熱田丸に乗船した。横浜港を出帆する前に船上にて渡欧見送りの写真が残されている。左から島木赤彦、斎藤紀一(養父)、茂吉、茂太(長男)、平福百穂、てる子(妻)、清子(てる子妹)、ひさ(養母)である。赤彦と百穂は和服で、他の男性は洋装に帽子、女性は和服である。長男の茂太はブレザーに半ズボンを穿き、和服に帽子の百穂が肩に手をかけている。茂吉は左手に本を掲げ、やや斜めに向いている。茂太は5歳であり「船に乗ったのがうれしくて、あちこちはしゃぎ廻っていて、父のことなど念頭になかったのに違いない」¹⁰⁾と回想している。

なお熱田丸¹¹⁾は、1909(明治42)年3月3日に欧州新航路のために、三菱長崎造船所で建造された日本郵船の貨客船である。現在、横浜の山下公園に氷川丸が繋留しているが、当時の貨客船名は、熱田神宮、榛名神社、氷川神社などにちなみ、神社名が使われていたのである。茂吉は『作歌四十年』で次のように回顧する。

門司を出航、玄界灘の浪に酔い、上海、香港、新嘉坡、いずれも珍らしからぬものはなく、ぎりぎりに時間を利用して見物したものである。(略)いかにしても粗雑な歌、日記の歌、おぼえの歌の域を脱し切れぬということになるのであった。¹²⁾

あくまでも備忘録として作歌したという。横浜を出帆後、神戸に寄港する。その間に、兵庫県西宮香栢園の中村憲吉宅へ泊る。11月1日、神戸を出帆し、2日は門司着。3日門司を出帆し、5日上海着、10日香港着、15日シンガポール(新嘉坡)着、18日マレーのマラッカ(ムラカ)着、19日マレーのピナン(ペナン)着、24日セイロン島(現スリランカ)のコロンボ(現在首都はスリジャワルダナプラコッテ)着となる。12月1日アデン湾を航行、3日紅海を航行、7日スエズ上陸、9日地中海を航行、14日8時過ぎにフランスのマルセイユに到着した。

「寒サヒドク 白霜深シ 向ウノ山、冬ガレ、岩石多ク、日テル」とある。48日間の船旅であった。『作歌四十年』では、次のような歌を記している。

空ひくく南十字星を見るまでに吾等をりけるわたつみのうへ 新嘉坡
赤き道椰子の林に入りにはけり新嘉坡のこほろぎのこゑ

マラツカの山本に霞たなびけりあたたかき国の霞かなしも 十一月十八日マラツカ
その角をうつくしく塗れる牛いくつも通るペナンに來れば 十一月十九日ペナン
冬さむき国いでて遠くわたりけりセイロンの島に螢見れば 十一月二十四日セイロン
あらはれし二つの虹のにはへるにひとつはおぼろひとつ清けく 十一月二十六日印度洋
空のはてながき余光をたもちつつ今日よりは日がアフリカに落つ 十二月一日アデン湾
夜八時バベルマンデブの海峡を過ぎにけるかも星かがやきて 十二月三日紅海

船中で同室となったのは、茂吉と薬師寺主計(工学博士)、庄司義治(後に東大名誉教授)、神尾友修(後に耳鼻医)の四人であった。神尾とは一高、東京帝国大学と同級生であった。茂吉は、上海、香港、シンガポール、コロombo等へ寄港すると上陸し、神尾の三菱支店長への紹介で案内をしてもらい、ご馳走になった。神尾が次のように語っている。

スエズに着いて見物に上陸しようとするに船長がエジプトの革命最中だから止めよと言ふ。それを前記の四人で強行した。カイロ迄夜行列車で行って、ピラミッドを一日見物した。そこで進められて駱駝に乗ったのだが、乗る時土人から注意されたけれども通訳係の僕にもよく分からず、そのまま乗った。所が駱駝は尻の方から先に足を立てるので、前の方へはねとばされる、その注意だつたらしい。其時は斎藤君だけが駱駝の頭を超えて落ちてしまったのを覚えてゐる。かうした失策はいくつも斎藤君がやるので同室の吾々は退屈するといふことはなかつた。

君は船中いつも健康で、船旅につよく、僕など地中海の荒れに出あつて酔つて食事出来ぬ折も、平気で食事をとつた。さうしていつも手帳を手にして、どこへいつても案内人の言ふこともこまごま聞いては書きつけるた。¹³⁾

今では差別的な表現もある。「渡欧途次エジプト」の写真には、遠くにピラミッド、駱駝に乗った四人である。ナイル河の歌がある。

はるばると砂に照りつくる陽に焼けてニルの大河けふぞわたれる
はるかなる国にしありき埃及のニルの河べに立てるけふかも

茂吉は12月5日にはパリへ、12月20日にはベルリンにへ到着し、いよいよ博士論文を仕上げるための研究生生活が始まったのである。留学中の茂吉の研究上の為事については割愛するが、1923(大正12)年9月1日の関東大震災の悲報が届いた。家族は無事であったが、青山脳病院の屋根瓦は崩壊し、煉瓦や柱に大損を受けた。財政的に困窮となり、茂吉の留学の継続も危ぶまれた。

また、随筆『エミール・クレペリン』に、1923(大正12)年10月11日ミュンヘンの特別講義で、敬愛するクレペリンに、講演会終了後に握手を求めたが拒否された(握手拒否事件)ことについて記し、粘着型の茂吉は、いつまでも忘れることができなかった。これは、第一次世界大戦で敵国だった日本人に握手を拒否したクレペリンの狭量もあった。次男宗吉(北杜夫)は、幾度も昂奮した口調でクレペリンの無礼さを聞かされたという。

北杜夫は『楡家の人びと』でこの場面を「長年の間敬慕していたこの碩学の掌を、なんとしても握りたかった。それで、クレペリンとジャワの医者¹⁴⁾の握手がまだ済まぬ一瞬に、我知らず、自分から手を出しかけた。と、白髪¹⁵⁾の老学者は、握手の終わった手をそのままつとひっこめ、くるとこちらに背を向けるなり、階段を降りていったしまった。(略) 屈辱と憤怒の念に固く縛られ、(略) 両の拳をしっかりと握りしめていた。その拳が小刻みに震えるのを彼は自覚した。(略) 彼の唇はわなわなと震えた。それは言葉を形造りはしなかった。(略) 憐れむべき、それだけに鞏固な生のままの感情に圧倒されながら、こんな田夫のような罵詈を幾遍となく繰返したのである」¹⁴⁾という。『楡家の人びと』は、精神科三代の斎藤家をモデルとした創作であるが、父茂吉が言葉に発せなかった積年の悔しさや鬱憤を息子が晴らしたのではないだろうか。

4. 妻てる子との合流

妻てる子は関東大震災により一時は中止を決めていたが、1924(大正13)年6月5日、箱根丸にて横浜を出帆し、パリに向かった。てる子は、戦後になって世界各地を歴訪し「猛女とよばれた淑女」と言われるだけに、単身で出掛けたのである。7月23日朝、パリのリヨン駅近くのホテル・アンテルナショナルで妻てる子と落ち合った。その後、てる子と共にパリ、ベルリン、チューリッヒなど欧州各地を巡歴した。ベルリン市立劇場モルトケ像前で撮影した茂吉夫妻の写真が残っている。随筆『妻』には次のように言う。

僕は西暦一九二四年の初秋から、鼻の低い足の短い妻を連れて欧羅巴の大都市を歩いていた。ショペンハウエルが、満身の力をこめて罵倒した欧羅巴の女どもといえども、どうしても僕の妻より器量が良い。けれどもそれを逆にいえば、僕は黄顔細鼻の男に過ぎぬ。(略) 諦念して二人は一しょに歩いていた。

仏蘭西から英吉利に渡り、英吉利から和蘭、独逸、瑞西とまわって伊太利のミラノに來た。ミラノに來たのは僕は二度目である、そうして歩いているうちに妻はいつのまにか懐妊していた。僕はミラノでレオナルド・ダ・ヴィンチ一派の絵画をもう一遍見直そうとして、たびづかれ旅疲のしている妻を引張りまわしながら丸三日を過ごした。妻は美術館などに入っても、絵画などはどうでもいいというような顔付をして茫然としていることが多かった。けれども僕はそんなことはかまっていられないような気がして精を出して見て歩いた。

十月二日にミラノを立ってヴェネチアに向った。仏蘭西を出てからも二月ほどになった。汽車は急行で、まつしぐら東方へ向って驀地に走っている。しばらくの間無言でいた妻は、その時々の前置もなしに僕にむいた。そして二人はこういう会話をした。

「日本の梅干ねえ」「何だ」「おいしいわね」

会話はそのまま途切れてしまったけれども、僕はその時、今までに経験しなかった一つの感情を経験したのであった。夫婦なんぞというものは一生のうちに一度ぐらいは誰でもこういう感情を経験するものかも知れぬ。あるいは運のいい夫婦はしじゅう経験しているのかも知れぬ。¹⁵⁾

てる子は懐妊していたのである。この時の子どもが1925(大正14)年2月23日に生まれた百子である。画家で歌友の平福百穂から取った名前である。「みごもりし妻いたはりてベルリンの街上ゆけば秋は楽しも」と詠んでいる。

茂吉とてる子がパリで落ち合ったのが前年の7月23日であるから、百子は7か月と6日(250日)で生まれたのである。この早産については疑義が無いわけではない。夫婦間の事であり詮索は愚かであるが、後にてる子のダンスホール事件等を勘案するに、渡欧することで、てる子が帳尻合わせをしたというのは言い過ぎであり、慎まなければならないだろう。

孫娘の齋藤由香は、「輝子が十八歳になると、ついに茂吉と正式な結婚式をあげることになった。茂吉は未だ山片弁丸出しの田舎者で、すでに額も禿げ上がり始めた三十一歳。お嬢様の輝子とは生れ育ちが百八十度も違う田夫野人とのバランスに欠けた結婚を、よくぞ輝子は承諾したと思う」¹⁶⁾と言う。てる子は、絶対的存在者であった父紀一の意向により9歳で婚約をした。茂吉を田夫野人、てる子を「お嬢様」と呼ぶように、琴瑟相和すとは言い難い。性格も粘着型、律儀な茂吉に対し、自由奔放なてる子である。但し、孫娘とは言え田夫野人という表現は、茂吉には酷すぎるのではないだろうか。

上田三四二は「一つには、神経質で、かつ一方では余りに吞気すぎる茂吉の、家庭人としてのあつかい難さである。あまつさえ、この難物は、詩人という一層非家庭的な生き方を本願としていた。二つには、趣味と育ちの相違である。(略)三つには、茂吉の養子としての身分である」¹⁷⁾と分析している。

5. 帰路榛名丸での船旅

茂吉はウィーン大学、ドイツ精神医学研究所での研鑽の結果、博士論文を仕上げ欧州留学への目的を遂行し、渡欧前の鬱屈した精神的負荷から解放された。これで意気軒昂と母国へ、あるいは青山脳病院へ凱旋できるのであった。

茂吉とてる子は、1924(大正13)年11月30日マルセーユで榛名丸に乗船した。船長は中村操、事務局長金井藤三郎であった。森鷗外の『西遊日記』『還東日記』を意識してか、茂吉には『日本帰航記』¹⁸⁾がある。帰路は12月5日ポートサイド、スエズ運河を航行、6日紅海へ、11日アラビア海を航行、17日コロombo上陸、21日スマトラ海峡を航行、21日シンガポールに寄港、24日南シナ海に入り、29日香港、31日台湾海峡を航行、1月2日上海に寄港、5日午後5時に神戸港に到着した。37日間の船旅であった。

同書には、船上から眺望する陸地の山々などのスケッチが数多くある。順風は続かず波高く上下に船体が揺れる時もあり、赤道直下では連日蒸し暑く、驟雨もあった。体調悪く下痢が続いた時もある。娯楽もあり、船上でDeckgolfを楽しん。12月15日には夜食後、船員による芝居があった。「アダカ関所ノ場デ弁慶ハ会計ヲ読ミ上ゲタ。ソレカラ小川巡查、罪(社会劇)ヲヤツタ。(略)追分節ト安来節ヲ歌ツテ女ガタデヲドツタ。(略)尺八デ三人ノ六段ノ合奏ヲヤツタ。(略)船員ニハコレホド器用ナ人々ハキルノデ僕ハ感心シテキル。行為ハ洗練サレテ乗客ノ

気ニサカラフヤウナコトハ少シモナイヤウニシテキル。言葉ヅカヒナドモヤサシクテ蚤モ殺サヌヤウデアル」とあり、船員のホスピタリティーを絶賛している。

また、12月20日には午後9時に船員の仮装行列があった。「巡查トカ相撲トカノナカニ、サカ立シタヤウナ貌デアブナカシク歩イテキルノガアツタ。(略) 大キナ帽子ヲカブツテ原ノ處ニカホノ形ヲカイトソレガ動イテキタ。コレガナカナカツサイヲウケタ。月琴ノ五六人ノ隊モアツタ。ソレカラ地雷也ノがまモキタ。さんたくろすノ爺サンモキタ。(略) 獅子舞モアツタ。(略) 投票用紙ヲクバツテソレデ皆ガ投票シタ」¹⁹⁾とある。

さらに、「チップ」に関して「神戸、マルセーユ間 部屋ボーイ25圓 - 30圓 食卓ボーイ20圓 - 25圓 甲板ボーイ5圓 - 10圓 風呂ボーイ5圓 - 10圓 二等スチアード10圓 事務長及司厨長ニハ普通ハ心付ヲヤラズ。酒場ボーイニハヤル人モアレドモヤラヌ人多シ」²⁰⁾とある。

てる子と二人で合計240圓の支払いであった。船旅も香港を過ぎると、茂吉は次のように回顧している。

大体こういう航海をつづけ、心も幸福であった。足掛け五年、丸三年数ヶ月の留学を了え、数篇の論文を完成し、見るべきものの大体を見、そして妻にも欧羅巴の都市の輪郭を見せたのであって、今やその帰途に就くのである。迎えてくれる親、兄弟、友人等の顔が見えるようである。²¹⁾

至福の時を迎える直前に、12月30日午後11時香港、上海間の船上に電報が届いた。『日本帰航記』には「十二月二十九日午前十時廿五分青山局発デ『サクヤビヤウインシユツクハマルヤケ』カゾクブジ』トシテアツタ。『サイトウ』トシテアツタ。万事ガコレデオシマヒニナツタヤウナ気ガシタ」²²⁾とある。この後、茂吉には青山脳病院再建、院長就任、患者逃亡、自殺など艱難辛事が待ち受けていたのであった。

6. まとめ

岡井隆は、「マルセーユへ上陸したところからはほとんど歌がなくなっていきます。そして三年何か月の間はほとんど歌作がない」²³⁾と言ひ、茂吉は留学中には作歌活動を休止していたと論じている。留学中の歌集『遠遊』『遍歴』は戦後になっての刊行である。

茂吉は、留学後に精神医学の研究を志望していたと考えられる。留学中も研究に必要な専門書を大量に購入し、一足早く自宅へ送っていた。しかし、すべて灰燼に帰してしまった。

内村祐之の「科学者としての茂吉」では、茂吉の研究生生活は四年間の留学期間で終わりを告げ、その後は全くの空白という。その理由を二つ挙げている。

一つは、彼は帰国後も研究生生活をつづけようと志して、留学中にその基礎をつくろうと努力したのであるが、帰国後の周囲の事情がこれをゆるさず、心ならずも研究生生活を中絶したのだという見方。第二は、外国の事情を見学し、できれば学位論文ぐらひは作ろうと、いささからくな気もちで研究生生活に入ったが、もちまえの克明さと、真理に対する憧憬と興

味から、しらずしらずの間に研究に没頭してしまったのだという見方。（略）

私は第二の可能性が大きいと答えたい。（略）歌道に十分な興味と自信を持つ茂吉が、これをなげうってまで研究生活に没頭できると考えていなかったことはたしかだろうし、まして家業として課せられた大学病院経営の義務を軽んじ得なかったとするならば、茂吉が留学を転機として純粋な学究生活に転向しようと考えたことはまずなかったろうと思ってよい。その上、この第二の考え方はいかにも茂吉の人がらにふさわしいではないか。そこで私は第二の可能性を正しいとしたいのである。²⁴⁾

青山脳病院の火難が無ければ、臨床医として研究生活をする余裕があったと思う。火災保険も失効していて、金策に翻弄され、住民の反対運動で郊外への移転も余儀なくされた。当時の日記を見れば、艱難辛苦の日常である。この点を割り引いて勘案するに、必ずしも内村の第二の可能性は正解とは言えないであろう。むしろ茂吉は背筋を伸ばした第一と背中を丸めた第二の見方の中を浮遊し、懊悩していたのであろう。

注

- 1) 『斎藤茂吉全集』第27巻（1974）岩波書店、pp.109~110
- 2) 同書、p.109
- 3) 同書、p.111
- 4) 山上次郎（1974）『斎藤茂吉の生涯』文藝春秋、p.244
- 5) 斎藤茂吉（1971）『作歌四十年 自選自解』筑摩書房、p.72 なお Eiwiss とは蛋白質。
- 6) 『全集』第33巻、p.410
- 7) 北杜夫（2001）『壮年茂吉 「つゆじも」～「ともしび」時代』岩波現代文庫、p.66
- 8) 岡田靖雄（2000）『精神病医 斎藤茂吉の生涯』思文閣出版、p.190
- 9) 東京市長は後藤新平であった。後に前田多門は、東久邇宮内閣の文部大臣に就任した。娘は精神科医神谷美恵子である。
- 10) 斎藤茂太（2000）『茂吉の体臭』岩波現代文庫、p.220
- 11) jpnsnships.g.dgdg.jp 「なつかしい日本の汽船」より。総トン数8,523トン、主機関は三連成2、最強速度は16.17ノット。昭和17年5月30日に門司から高雄に向け航行中、沖縄沖で米潜水艦の雷撃にて大破、6月3日沈没。
- 12) 『作歌四十年 自選自解』p.74
- 13) 『アララギ 斎藤茂吉追悼号』第46巻第10号（1953）「渡欧同行の記」pp.34～35
- 14) 北杜夫（1971）『楡家の人びと（上）』新潮文庫、p.218
- 15) 阿川弘之・北杜夫編（1986）『斎藤茂吉随筆集』岩波文庫、pp.93～95
- 16) 斎藤由香（2008）『猛女とよばれた淑女 祖母・斎藤輝子の生き方』新潮社、p.14
- 17) 上田三四二（1964）『斎藤茂吉』筑摩書房、p.225

- 18) 『全集』第29巻、pp.1 ～ p.76
- 19) 同書、p.44
- 20) 同書、p.75
- 21) 『作歌四十年 自選自解』p.110
- 22) 『全集』第29巻、p.67
- 23) 岡井隆 (1995)『茂吉の短歌を読む』岩波書店、p.19
- 24) 『アララギ 斎藤茂吉追悼号』p.46 内村祐之は、内村鑑三の息子で精神病学者。東京帝国大学を卒業し、1925(大正14)年から2年間ドイツのミュンヘンに留学する。茂吉の後輩に当たる。

(2021.9.17 受稿, 2021.11.5 受理)